

黄幡^{きんぱん}1号遺跡見学会資料

平成 15 年 8 月 2 日

主催：財団法人東広島市教育文化振興事業団
東 広 島 市 教 育 委 員 会

1 はじめに

黄幡 1 号遺跡は、東広島市西条町下見に所在する弥生時代前期末から中期中頃にかけての遺跡で、財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センターでは一般県道吉川西条線道路改良工事に先立って、5 月 1 日から発掘調査を実施しています。



2 検出の遺構と遺物

調査の結果、丘陵の裾部をめぐる自然流路と、この流路に堆積した包含層を掘り込んで造られた木樋を伴う水路遺構を検出しました。木樋の規模は長さ約5 m、幅約50 cm、深さ約15 cm、厚さ約5 cmで、木樋は谷の奥側（東側）から西側にかけて傾斜しています。

木樋の外側のうち北側は、多数の杭を打ち込んで固定し、南側は一部に杭を打ち込んでいますが、板材等を横にして固定しています。また、木樋の下側には板材が置かれており、木樋の沈降を防止するためのものと思われます。

木樋が造られた時期については、包含層から出土する土器が弥生時代前期末から中期中頃のものに限られることやそれ以降の時代の遺物がほとんどないことなどから、中期後半頃には造られたものと考えられます。

また、遺物としては大量の弥生土器のほか、ミニチュア土器・分銅形土製品・紡錘車などの土製品、石包丁・石斧・石鏃などの石製品、木製の鍬・鋤などがあります。

3 まとめ

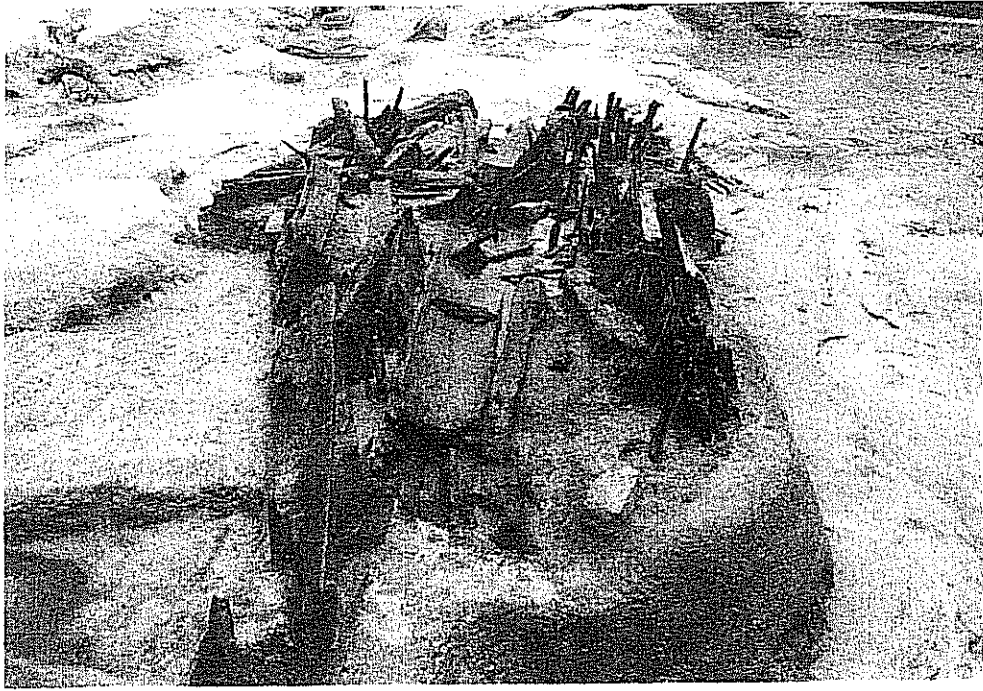
今回の調査においては、弥生時代中期にさかのぼる木樋を検出しました。このような出土例は、県内はもとより中国地方においても数少なく、鳥取県青谷町所在の青谷上寺地遺跡で弥生時代後期の類例が知られている程度です。また、他の地域においても沖積平野における水田跡の調査において、堰の存在は知られていますが、本遺跡のような木樋はほとんど存在しません。このようなことから、今回の調査では小地域における谷水田の農業経営のあり方を示すとともに、当時の土木技術や木材加工技術のあり方を示す良好な資料となりました。

また、ミニチュア土器や分銅形土製品などの存在から水際における祭祀が行われた可能性も考えられます。

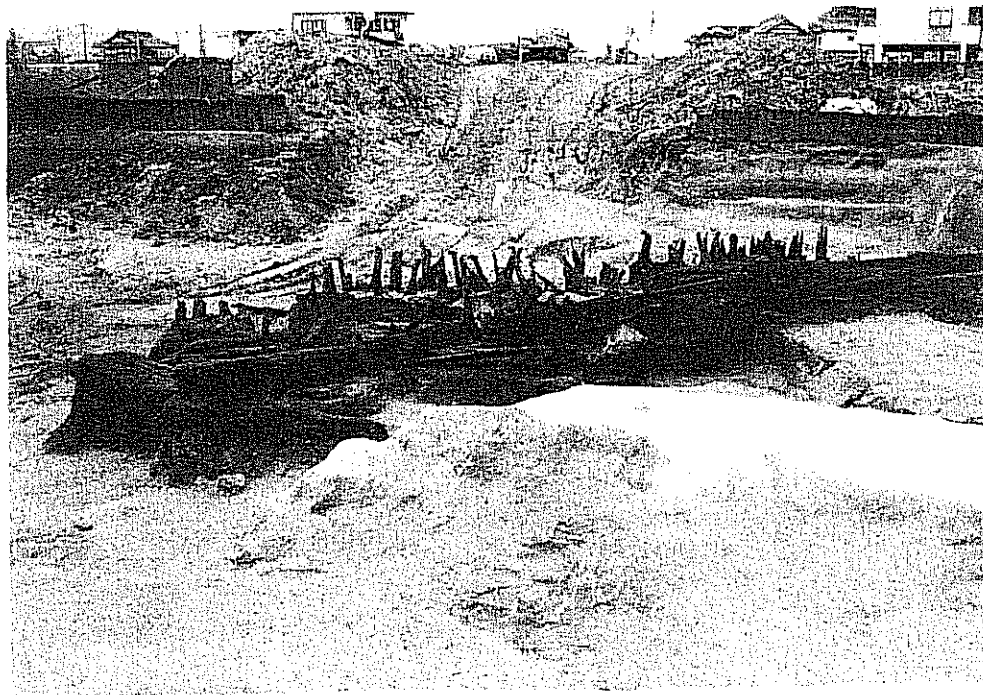
一方、本遺跡を営んだ人々の集落については、本遺跡周辺の立地状況や出土土器の状態などから本遺跡に近接して存在したものと考えられます。



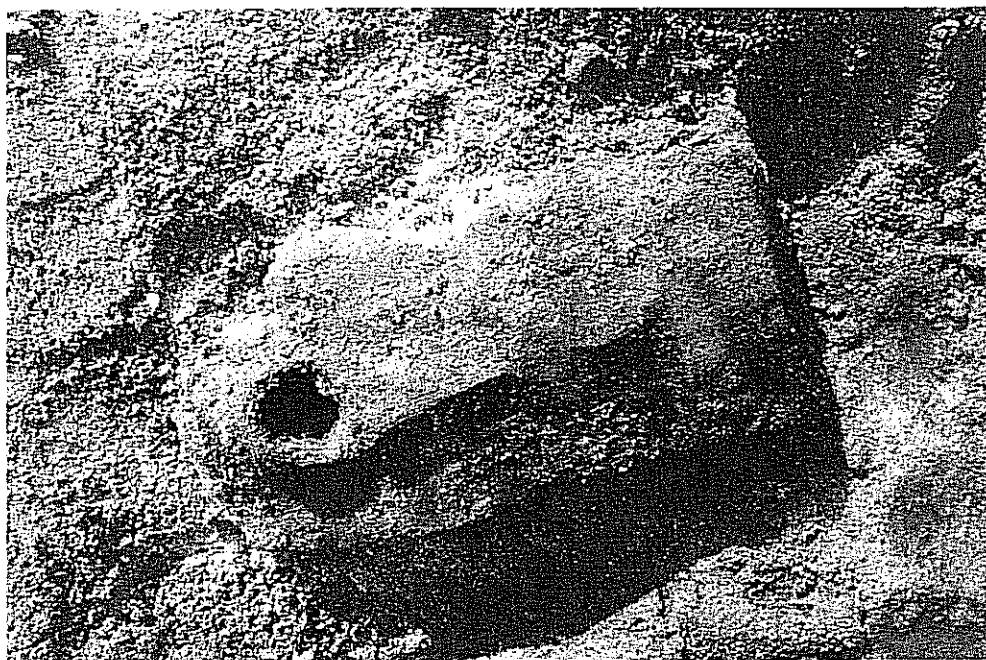
幡 1 号遺跡 木樁検出状況図



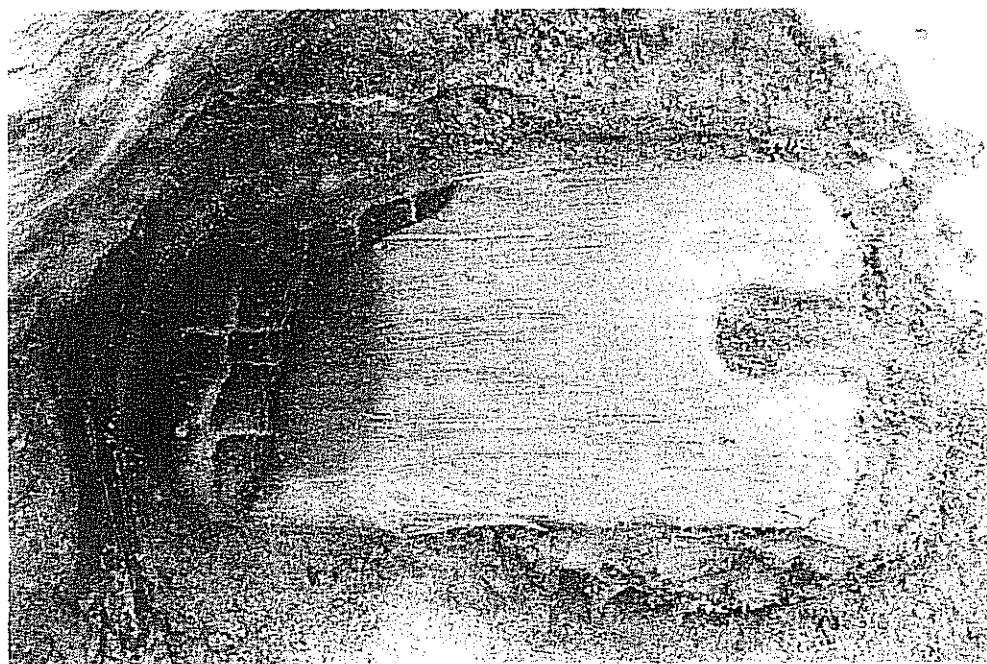
木槌検出状況



木槌検出状況



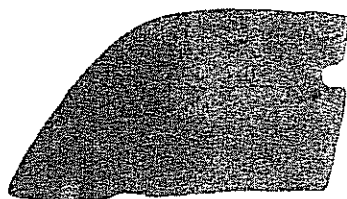
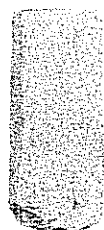
鋤出土状況



鋤出土状況



扁平片刃石斧

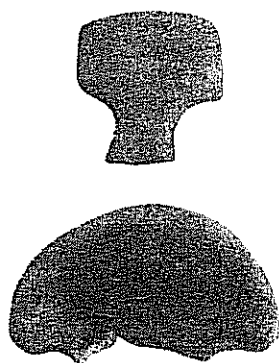


石包丁

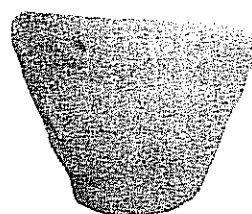
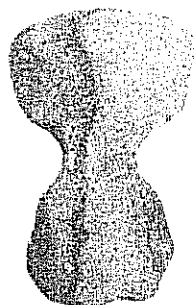


紡錘車

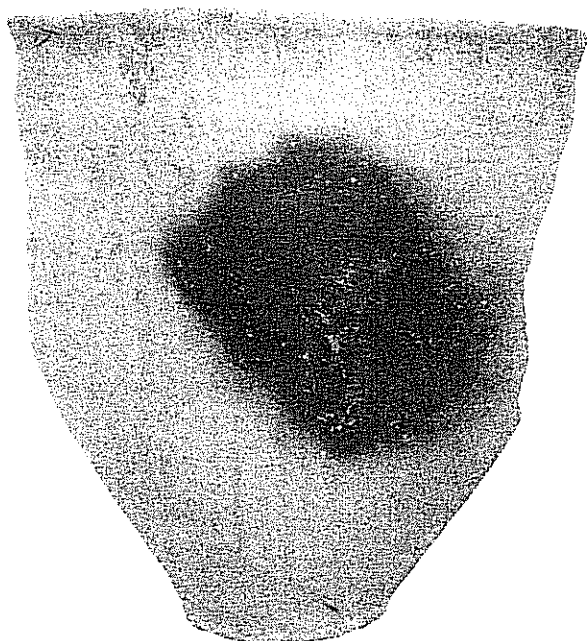
抉入柱状片刃石斧



分銅形土製品



ミニチュア土器



弥生前期 甕形土器



弥生前期 壺形土器